

伯爵の釵

泉鏡花

青空文庫

このもの語がたりの起つた土地は、清きと、美しきと、二筋の大川、市の両端を流れ、真中央まんなかに城の天守なお高く聳そびえ、森黒く、濠蒼ほりあおく、国境の山岳は重ちようじよう 疊じようとして、湖を包み、海に沿い、橋と、坂と、辻の柳、豊の浪の町を抱いだいた、北陸の都である。

ひととせ
一年、激しい早魃かんばつのあつた真夏の事。

……と言うとたちまち、天に可恐おそろしき入道雲湧わき、地に水論の修羅の巷ちまたの流れたように聞えるけれど、決して、そんな、物騒な沙汰さたではない。

かかる折から、地方巡業の新劇団、女優を主とした帝都の有名なる大一座が、この土地に七日間の興行して、全市の湧くがごとき人気を博した。

極暑ひでりの、早ひでりというのに、たといいかなる人気にせよ、湧くひでりの、煮えるのなどは、口にするも暑くるしい。が、——諺ことわざに、火事の折から土蔵の焼けるのを防ぐのに、大おお 盥おだらいに満々みんみんと水を湛たたえ、蠟燭ろうそくに灯を点じたのをその中に立てて目塗めぬりをすると、壁を透とおして煙けむりが裡うちへ漲みなぎつても、火気を呼ばないで安全だと言う。……火をもって火を制するのだそうである。

ここに女優たちの、近代的情熱の燃ゆるがごとき演劇は、あたかもこの轍だ、と称えて
可い。雲は焚け、草は萎み、水は涸れ、人は喘ぐ時、一座の劇はさながら褥熱に對す
る氷のごとく、十万の市民に、一劑、清涼の氣を齎らして剰余あつた。

膚の白さも雪なれば、瞳も露の涼しい中にも、拳つて座中の明星と称えられた村井紫
玉が、

「まあ……前刻の、あの、小さな児は？」

公園の茶店に、一人静に憩いながら、緋塩瀬の煙管筒の結目を解掛けつつ、偶と思
つた。……

鬚も女優卷でなく、わざとつい通りの束髪で、薄化粧の淡洒した意気造。形容に合
せて、煙草入も、好みで持った氣組の婀娜。

で、見た処は芸妓の内証歩行という風だから、まして女優の、忍びの出、と言つて
も可い風采。

また實際、紫玉はこの日は忍びであつた。演劇は昨日楽になつて、座の中には、直ぐに
次興行の隣国へ、早く先乗をしたのが多い。が、地方としては、これまで経歴つたそこ
かしこより、観光に価値する名所が夥い、と聞いて、中二日ばかりの休暇を、紫玉はこの

土地に居残った。そして、旅宿に二人附添った、玉野、玉江という女弟子も連れな
いで、一人で密と、……日盛もこうした身には苦にならず、町中を見つつ漫に來た。

惟うに、太平の世の国の守が、隠れて民間に微行するのは、政を聞く時より、どんなにか得意であろう。落人のそれならで、そよと鳴る風鈴も、人は昼寝の夢にさえ、我名

を呼んで、讚美し、歎賞する、微妙なる音響、と聞えて、その都度、ハツと隠れ忍んで、微笑み微笑み通ると思え。

深張の涼傘の影ながら、なお面影は透き、色香は仄めく……心地すれば、誰憚りともなく自然から俯目に俯向く。謙讓の棲はずれは、倨傲の襟より品を備えて、尋常な姿容は調つて、焼地に焦りつく影も、水で描いたように涼しくも清爽であつた。

わずかに畳の縁ばかりの、日影を選んで辿るのも、人は目を睜つて、鯨に乗つて人魚が通ると見たであろう。……素足の白いのが、すらすらと黒縹子の上を這れば、溝の流も清水の音信。

で、真先に志したのは、城の櫓と境を接した、三つ二つ、全国に指を屈するという、景勝の公園であつた。

二

公園の入口に、樹林を背戸に、蓮池はすいけを庭に、柳、藤、桜、山吹など、飛々とびとびに名に呼ばれた茶店がある。

紫玉が、いま腰を掛けたのは柳の茶屋というのであった。が、紅い襷あかたすきで、色白な娘が運んだ、煎茶せんちやと煙草盆たばこぼんを袖に控えて、さまで嗜むたしなともない、その、伊達だてに持った煙草入を手にした時、――

「……あれは女の児こだったかしら、それとも男の児こだったろうかね。」

――と思い出したのはそれである。――

で、華奢造りの黄金煙管きんぎせるで、余り馴なれない、ちと覚束おぼつかない手つきして、青磁色の手つきの瀬戸火鉢を探りながら、

「……帽子を……被かぶっていたとすれば、男の児こだろうが、青い鉢巻むぎわらだっけ。……巻いた切きれたつたろうか、それともリボンかしら。色は判然はつきり覚えているけど、……お待ちよ、――とこうだから。……」

取って着けたような喫のみ方だから、見ると、ものものしいまでに、打傾うたかいて一口吸って、

「……年紀は、そうさね、七歳か六歳ぐらいな、色の白い上品な、……男の児にしてはちと綺麗過ぎるから女の児——だとりボンだね。——青いりボン。……幼稚くたって緋と限りもしないわね。では、やつぱり女の児かしら。それにしては麦藁帽子……もつともおさげに結つてれば……だけど、そこまでは気が付かない。……」

大通りは一筋だが、道に迷うのも一興で、そこともなく、裏小路へ紛れ込んで、低い土塀から瓜、茄子の畠の覗かれる、荒れ寂れた邸町を一人で通つて、まるつきり人に行合わず。白熱した日盛に、よくも羽が焦げないと思う、白い蝶々の、不意にスツと来て、ひらひらと擦違うのを、吃驚した顔をして見送つて、そして莞爾……したり……そうした時は象牙骨の扇でちよつと招いてみたり。……土塀の崩屋根を仰いで血のような百るすべり
日紅の咲満ちた枝を、涼傘の尖で擦ぐる、と堪らない。とぶるぶるゆさゆさと行るのに、
「御免なさい。」と言つてみたり。石垣の草蒸に、棄ててある瓜の皮が、化けて脚が生えて、むくむくと動出しそうなのに、「あれ。」と飛退いたり。取留めのないすさびも、この女の人気なれば、話せば逸話に伝えられよう。

低い山かと見た、樹立の繁つた高い公園の下へ出ると、坂の上り口に社があつた。宮も大きく、境内も広がつた。が、砂浜に鳥居を立てたようで、拝殿の裏畦には鬱

々たるその公園の森を負いながら、広前は一面、真空なる太陽に、礫の影一つなく、ただ白紙を敷詰めた光景なのが、日射に、やや黄んで、渺として、どこから散ったか、百日紅の二三点。

……覗くと、静まり返った正面の階の傍に、紅の手綱、朱の鞍置いた、つくりものの白の神馬が寂寞として一頭立つ。横に公園へ上る坂は、見透しになっていたから、涼傘のままスツと鳥居から抜けると、紫玉の姿は色のまま鳥居の柱に映って通る。……そこに屋根囲した、大なる石の御手洗があつて、青き竜頭から湛えた水は、且つすらすらと玉を乱して、颯と簾に噴溢れる。その手水鉢の周囲に、ただ一人……その稚児が居たのであつた。

が、炎天、人影も絶えた折から、父母の昼寝の夢を抜出した、神官の児であらうと紫玉は視た。ちらちら廻りつつ、廻りつつ、あちこちする。……

と、御手洗は高く、稚児は小さいので、下を伝うてまわりを廻るのが、さながら、石に刻んだ形が、噴溢れる水の影に誘われて、すらすらと動くような。……と視るうちに、稚児は伸上り、伸上つては、いたいけな手を空に、すらりと動いて、伸上つては、また空に手を伸ばす。――

紫玉はズツと寄った。稚児はもう涼傘の陰に入ったのである。

「ちよつと……何をしているの。」

「水が欲しいの。」

と、あどけなく言った。

ああ、それがため足場を取つては、取替えては、手を伸ばさず、が爪立つても、青い巾きれを巻いた、その振分髪、まろが丈は……筒井筒つついづつその半なかばにも届くまい。

三

その御手洗の高い縁に乗っている柄杓ひしゃくを、取りたい、とまた稚児がそう言った。

紫玉は思わず微笑ほほえんで、

「あら、こうすれば仔細わづかないよ。」

と、半身を斜めにして、溢れかかる水の一筋を、玉の雫しずくに、颯さつと散らして、赤く燃ゆるような唇うづに請けた。ちようど渴かわいてもいたし、水の潔きよい事を見たのは言うまでもない。

「ねえ、お前。」

稚児が仰いで、熟と紫玉を視て、

「手を浄める水だもの。」

直接に吻を接るのは不作法だ、と咎めたように聞えたのである。

劇壇の女王は、気色した。

「いやにお茶がつてるよ、生意気な。」と、軽くその頭を掌で叩き放しに、衝と広前を切れて、坂に出て、見返りもしないで、さてやがてこの茶屋に憩ったのであった。――

今思うと、手を触れた稚児の頭も、女か、男か、不思議にその感覚が残らぬ。気は涼しかったが、暑さに、いくらか茫としたものかも知れない。

「娘さん、町から、この坂を上る処に、お宮がありますわね。」

「はい。」

「何と言う、お社です。」

「浦安神社でございますわ。」と、片手を畳に、娘は行儀正しく答えた。

「何神様が祭つてあります。」

「お父さん、お父さん。」と娘が、つい傍に、蓮池に向いて、（じんべ）という膝ぎりの帷子で、眼鏡の下に内職らしい網をすいている半白の父を呼ぶと、急いで眼鏡を外し

て、コツンと水牛の柄を畳んで、台に乗せて、それから向直つて、丁寧に辞儀をして、

「ええ、浦安様は、浦安かれとの、その御守護じやそうにござりまして。水をばお司りな
されます、竜神と申すことでござります。これの、太夫様にお茶を替えて上げぬかい。」

紫玉は我知らず衣紋が締つた。……称えかたは相応わぬにもせよ、拙な山水画の裡の隠
者めいた老人までが、確か自分を知っている。

心着けば、正面神棚の下には、我が姿、昨夜も扮した、劇中女主人公の王妃なる、玉の
鳳凰のごときが掲げてあつた。

「そして、……」

声も朗かに、且つ慎ましく、

「竜神だと、女神ですか、男神ですか。」

「さ、さ。」と老人は膝を刻んで、あたかもこの問を待構えたように、

「その儀は、とかくに申しますが、いかがか、いずれとも相分りませぬ。この公園のず
つと奥に、真暗な巖窟の中に、一ヶ処清水の湧く井戸がござります。古色の夥しい青銅
の竜が蟠つて、井桁に蓋をしておりまして、金網を張り、みだりに近づいてはなりません
が、霊沢金水と申して、これがためにこの市の名が起りましたと申します。これが奥

の院と申す事で、ええ、貴方様が御意の浦安神社は、その前殿と申す事でござります。御参詣を遊ばしましたか。」

「あ、いいえ。」と言つたが、すぐまた稚児の事が胸に浮んだ。それなり一時言葉が途絶える。

森々たる日中の樹林、濃く黒く森に包まれて城の天守は前に聳ゆる。茶店の横にも、見上げるばかりの槐椶の暗い影が樅楓を薄く交えて、藍緑の流に群青の瀬のあるごとき、たらたら上りの径がある。滝かと思う蝉時雨。光る雨、輝く木の葉、この炎天の下蔭は、あたかも稲妻に籠る穴に似て、もの凄いまで寂寞した。

木下闇、その横径の中途に、空屋かと思う、廂の朽ちた、誰も居ない店がある：

：

四

鎖してはないものの、奥に人が居て住むかさえ疑わしい。それとも日が暮れると、白い首でも出てちとは客が寄ろうも知れぬ。店一杯に雛壇のような台を置いて、いとど薄暗

いのに、三方を黒布で張廻した、壇の附つけもと元に、流ながれぼし星の髑しやれこうべ髑ひからひとりむし、乾かわびた蛾かに似たものを、点々並べたのは的まとである。地方の盛場には時々見掛ける、吹矢の機からくり関とは一目視みて紫玉にも分つた。

実は——吹矢も、化ものと名のついたので、幽霊の廂ひあわい合の幕から倒さかさまにぶら下がり、見み越こし入道しゅうどうは逃あつらえた穴からヌツと出る。雪女は拵こしらえの黒塀うつつに薄うつつり立ち、産女うぶめどり鳥は石地藏いしじぞうと並んでしよんぼりたたずイむ。一ツ目小僧の豆腐買は、流ながれかんちよう灌頂くわんていの野川の縁へりを、大笠おおがさを俯うつむ向けて、跣はだし足でちよこちよこと巧あみに歩あ行くなど、仕掛ものになつてゐる。……いかがわしいが、生いきりよう霊と札の立つた就なかんずく中なか小さな的に吹当ふてると、床板ひつくりががらりと転ひつくり覆かえつて、大松茸おおまつたけを抱ひいた緋ひふんどしの禪ぜんのおかめが、とんぼ返にっこりりをして莞爾にっこりと飛出ひ出す、途端ひつくりに、四方へ引張ひっぱつた綱が揺れて、鐘と太鼓がしだらでんで一いちどき斉せいにがんがらん、どんどと鳴なつて、それで市いちが栄えいえた、店なのであるが、一ツ目小僧のつたい歩あ行く波張なみばりが切きぎれに、敷やぶだたみ畳は打倒ぶつたおれ、飾かざりの石地藏いしじぞうは仰向あやけに反かつて、視した処ところ、ものあわれなまで寂さびれていた。

——その軒のきの土間に、背うしろ後ごむきに蹲しゃがんだ僧そうぎよう形かたちのものがある。坊主ぼうしゆであろう。墨染すみぞめの麻あしの法衣ころもの破やれ破やれな形なりで、鬱金うこんももう鼠ねずみに汚これた布ぬいに——すぐ、分わつたが、——三味線さんまいせん

を一挺、盲目の琵琶背負に背負つてゐる、漂泊う門附の類であろう。

何をか働く。人目を避けて、蹲つて、虱を捻るか、瘡を搔くか、弁当を使うとも、掃溜を探した干魚の骨を舐るに過ぎまい。乞食のように薄汚い。

紫玉は敗竄した芸人と、荒涼たる見世ものに対して、深い歎息を漏らした。且つあわれみ、且つ可忌しがったのである。

灰吹に薄い唾した。

この世盛りの、思い上れる、美しき女優は、樹の緑蟬の声も滴るがごとき影に、框も自然から浮いて高い処に、色も濡々と水際立つ、紫陽花の花の姿を撓わに置きつつ、翡翠、紅玉、真珠など、指環を三つ四つ嵌めた白い指をツト挙げて、鬢の後毛を搔いたついで、白金の高彫の、翼に金剛石を鏤め、目には血髓玉、嘴と爪に緑宝玉の象嵌した、白く輝く鸚鵡の釵——何某の伯爵が心を籠めた贈ものとして、人は知って、(伯爵)と称うるその釵を抜いて、脚を返して、喫掛けた火皿の脂を浚つた。……伊達の煙管は、煙を吸うより、手すさみの科が多い慣習である。

三味線背負つた乞食坊主が、引搔くようにもぞもぞと肩を揺ると、一眼ひたと盲いた、眇の青ぶくれの面を向けて、こう、引傾つて、熟と紫玉のその状を視ると、肩を抽い

た杖つえの尖さきが、一度胸へ引込ひっこんで、前屈まえかがみに、よたりと立った。

杖を徑こみちに突立て突立て、辿たど々たどしく下聞したやみを蠢うごめいて下りて、城の方かたへ去るかと思えば、のろく後退あとじさりをしながら、茶店に向つて、吻ほっと、立直つて一息吐つく。

紫玉の眉ひその顰ひそむ時、五間ばかり軒を離れた、そこで早や、此方こなたへぐつたりと叩頭おしぎをする。知らない振ふりして、目をそらして、紫玉が釵ちかづに俯向うつむいた。が、濃い睫毛まつげの重くなるまで、坊主の影は近ちかづいたのである。

「太夫様。」

ハツと顔を上げると、坊主は既に敷居を越えて、目前めさきの土間に、両膝を折っていた。

「……………」

「お願ねがひでございます。……お慈悲あまのりじや、お慈悲あまのり、お慈悲。」

仮初かりそめに置いた涼傘ひがさが、襪はくろ法衣ころもの袖そでに触れそうなので、密そつと手元へ引いて、「何ですか。」と、坊主は視みないで、茶屋の父娘おやこに目を遣やった。

立たつて声を掛けて追おうともせず、父も娘も静しずかに視みている。

しばらくすると、この早ひでりに水は涸かれたが、碧へきり緑よくの葉の深く繁れる中なる、緋もみじ葉の滝と云うのに対して、紫玉は蓮はすいけ池みぎわの汀あるを歩行あるしていた。ここに別に滝の四阿あずまやと称なづけるのがあつて、八ツ橋を掛け、飛石を置いて、枝折戸しおりどを鎖とぎさぬのである。

で、滝のある位置は、柳の茶屋からだど、もとの道へ小戻りする事になる。紫玉はあの、吹矢みちの径みちから公園へ入らないで、引返したので、……涼傘なげやを投遣なげりに翳かきしながら、袖を柔かに、手首をやや硬くして、あすこで抜いた白金プラチナの鸚鵡おうむの釵かんざし、その翼をちよつと抓つまんで、きらりとぶら下げているのであるが。

仔細しさいは希有けうな、……

坊主が土下座して「お慈悲、お慈悲。」で、お願ねがひというのが金でも米でもない。施ほと与こしには違いなけれど、変な事には「お禁まし厭ないをして遣まわされい。虫菌うずが疚うずいて堪たえ難がたいではないと、成程左の頬がぷくりとうだばれたのを、堪さ難まい状まに掌てのひらで抱かかえて、首ひを引傾ひけた同じ方の一眼が白くどろんどろんとして潰つぶれている。その目からも、ぶよぶよした唇くちびるからも、汚しい液しるが垂たれそうな塩梅あんばい。「お慈悲じゃ。」と更に拜まじんで、「手足に五寸釘を打うたりようとでも、かくまでの苦惱くるしみはございますまいぞ、お情なさけじゃ、禁まし厭ないうて遣まわされ。」で、禁まし厭ない

とは別儀でない。——その紫玉が手にした白金ブラチナの釵を、齒のうろへ挿入さしいれて欲しいのだ
と言う。

「太夫様お手ずから。……竜なめくじと蛞蝓なめくじほど違いましたも、生しやうあるうちは私わしじやとて、芸人の端くれ。太夫様の御光明おひかりに照らされますだけでも、この疚痛いたみは忘れましょう。」と、
はッはッと息を吐く。……

既に、何人なんびとであるかを知られて、土に手をつけて太夫様と言われたのでは、そのいわゆる禁厭にくの断り悪さは、金銭の無心をされたのと同じ事——但し手から手へ渡すも恐れる……落して釵を貸そうとすると、「ああ、いや、太夫様、お手ずから。……貴女あなたさま様の膚はだの移うつり香が、脈ひびきの響をお釵から伝え受けたのでござります。貴方おかけ様の御血脈おけちみやく、それが禁厭にくになりますので、お手に釵の鳥をばお持ち遊ばされて、はい、はい、はい。」あん、と口を開いた中へ、紫玉は止やむ事を得ず、手に持添えつつ、釵の脚を挿入れた。

喘あえぐわ、舐しゃぶるわ！鼻息がむツと掛かか。堪たまらず袖を巻いて唇を蔽おおいながら、勢い釵とともに、やや白やかな手の伸びるのが、雪せつ白はくなる鷺がら鳥やうの七宝しやうの瓔珞やうらくを掛けた風情ふうじやうなのを、無性ぶしやう髯ひげで、チュツパと啜すすり込こむように、坊主は犬いぬ蹲つくばいになつて、頤あごでうけて、どろりと嘗なめ込こむ。

と、紫玉の手には、ずぶずぶと響いて、腐れた瓜を突刺す気味合。

指環は緑紅の結晶したる玉のごとき虹である。眩しかつたらう。坊主は開いた目も閉じて、ぼうとした顔色で、しつきりもなしに、だらだらと涎を垂らす。「ああ、手がだるい、まだ?」「いま一息。」——

不思議な光景は、美しき女が、針の尖で怪しき魔を操る、舞台における、神秘なる場面にも見えた。茶店の娘とその父は、感に堪えた観客のごとく、呼吸を殺して固唾を飲んだ。

……「ああ、お有難や、お有難い。トンと苦惱を忘れました。お有難い。」と三味線包がつくりと抜衣紋。で、両掌を仰向け、低く紫玉の雪の爪先を頂く真似して、「かように穢いものなれば、くどくどお札など申して、お身近はかえってお目触り、御恩は忘れぬぞや。」と胸を捻じめるように杖で立つて、

「お有難や、有難や。ああ、苦を忘れて腑が抜けた。もし、太夫様。」と敷居を跨いで、蹠踉状に振向いて、「あの、そのお釵に……」——「え。」と紫玉が鸚鵡を視る時、「齒くさが着いてはおりませぬか。恐縮や。……えひひ。」とニヤリとして、

「ちやつとお拭きなされませい。」これがために、紫玉は手を掛けた懐紙を、余儀な

くちよつと逡巡ためらつた。

同時に、あらぬ方かたに蒼つと面おもてを背けた。

六

紫玉は待兼ねたように懐紙かいしを重ねて、伯爵、を清めながら、森の径こみちへ行きまじか、坊主は、と訊きいた。父も娘も、へい、と言って、大方そうだろうと言う。——もう影もなかつたのである。父娘おやこはただ、紫玉の挙動ふるまいにのみ気を奪とられていたろう。……この辺を歩あ行く門附るみたいなもの、とまた訊けば、父親がついぞ見掛けた事はない。娘が跣足はだしでいました、と言つたので、旅から紛込んだものか、それも分らぬ。

と、言ううちにも、紫玉はちよいちよい眉ひそを顰ひそめた。抜いて持った釵かんざし、鬢びんず摺ずれに髪かみに返そうとすると、や、するごとに、手の撓しなうにさえ、得も言われぬ、異な、変な、悪臭においい、堪たまらない、臭におい気がしたのであるから。

城は公園を出る方で、そこにも影がないとすると、吹矢の道を上つたに相違ない。で、後へ続くには堪たまえられぬ。

そこで滝の道を訊いて——ここへ来た。——

泉殿せんでんに擬なぞらえた、飛々とびとびの亭ちんのいずれかに、邯鄲かんとんの石の手水鉢ちようずばち、名品、と教えられ

たが、水の音より蝉の声。で、勝手に通抜けの出来る茶屋は、昼寝の半ばらしい。どの座敷ひっそりも寂寞ひとけはいして人氣勢ひとけはいもなかつた。

御齒黒蜻蛉おはぐろとんぼが、鉄漿かねつけた女房にようぼの、微な夢かすかの影らしく、ひらひらと一つ、葉ばかりの燕子花かきつばたを伝つて飛ぶのが、このあたりの御殿女中の遣しやうよう遥しやうようした昔の幻を、寂しく描いて、都を出た日、遠く来た旅を思わせる。

すべて旧藩侯の庭園だ、と言うにつけても、贈おくりぬし主ぬしなる貴公子の面影さえ浮ぶ、伯爵の鸚鵡おうむを何としよう。

霊れい廟びやうの土の瘡おこりを落し、秘符の威徳の鬼を追うよう、たちどころに坊主の虫歯いを癒いやしたはさることながら、路々みちみちも悪わる臭くさの消えないばかりか、口中の臭気は、次第に持つ手を伝つたつて、袖にも移りそうに思われる。

紫玉は、樹の下に涼傘ひがさを畳んで、滝を斜めに視みつつ、池の縁へりに低くいた。

滝は、早ひでりにしかく骨なりといえども、巖いわには苔蒸こけむし、壺は森を被かいで蒼あおい。しかも巖いわがくれの裏に、どうどうと落ちたぎる水の音の凄すさましく響くのは、大樋おおといを伏せて二重に城の

用水を引いた、敵に対する要害で、地下を城の内濠に灌ぐと聞く、戦国の余残だそうである。

紫玉は釵を洗った。……艶なる女優の心を得た池の面は、萌黄の薄絹のごとく波を伸べつつ拭つて、清めるばかりに見えたのに、取つて黒髪に挿そうとすると、ちつと離したくらいでは、耳の辺へも寄せられぬ。鼻を衝いて、ツンと臭い。

「あ、」と声を立てたほどである。

雫を切ると、雫まで芬と臭う。たとえば貴重なる香水の薫の一滴の散るように、洗えば洗うほど流せば流すほど香が広がる。……二三度、四五度、繰返すうちに、指にも、手にも、果は指環の緑碧紅黄の珠玉の数にも、言いようのない悪臭が蒸れ掛るように思われたので。……

「ええ。」

紫玉はスツと立つて、手のはずみで一振振った。

「ぬしにおなりよ。」

白金の羽の散る状に、ちらちらと映ると、釵は滝壺に真蒼な水に沈んで行く。……あわれ、呪われたる仙禽よ。卿は熱帯の鬱林に放たれずして、山地の碧潭に謫され

たのである。……トこの奇異なる珍客を迎うるか、不可思議の獲ものに競うか、静なる池の面に、眠れる魚のごとく縦横に横わつた、樹の枝々の影は、尾鰭を跳ねて、幾千ともなく、一時に皆揺動いた。

これに悚然とした状に、一度すぼめた袖を、はらはらと翼のごとく搏いたのは、紫玉が、可厭しき移香を払うとともに、高貴なる鸚鵡を思い切つた、安からぬ胸の波動で、なお且つ翻々とふるいなながら、衝と飛退くように、滝の下行く棧道の橋に退いた。

石の反橋である。巖と石の、いずれにも累れる牡丹の花のごときを、左右に築き上げた、銘を石橋と言う、反橋の石の真中に立つて、吻と一息した紫玉は、この時、すらりと、脊も心も高かつた。

七

明眸の左右に樹立が分れて、一条の大道、炎天の下に展けつつ、日盛の町の大路が望まれて、煉瓦造の避雷針、古い白壁、寺の塔など睫を擽る中に、行交う人は点々と蝙蝠のごとく、電車は光りながら山椒魚の這うのに似ている。

忘れもしない、限界のその突当りが、昨夜まで、我あればこそ、電燭のきながら水晶宮のごとく輝いた劇場であつた。

ああ、一翳の雲もないのに、緑紫紅の旗の影が、ぱつと空を蔽うまで、花やかに目に翹つた、と見ると颯と近づいて、眉に近い樹々の枝に色鳥の種々の影に映つた。

蓋し劇場に向つて、高く翳した手の指環の、玉の矜の幻影である。

紫玉は、瞳を返して、華奢な指を、俯向いて視つつ莞爾した。

そして、すらすらと石橋を前方へ渡つた。それから、森を通る、姿は翠に青ずむまで、静に落着いて見えたけれど、二ツ三ツ重つた不意の出来事に、心の騒いだのは争われない。

……涼傘を置忘れたもの。……

森を高く抜けると、三国見霽しの一面の広場になる。赫と射る日に、手廂してこう視むれば、松、桜、梅いろいろ樹の状、枝の振の、各自名ある神仙の形を映すのみ。幸いに可憐い坊主の影は、公園の一本一草をも妨げず。また……人の往来うさえほとんどない。

一処、大池があつて、朱塗の船の、漣に、浮いた汀に、盛装した妙齡の派手な女が、番の鴛鴦の宿るように目に留つた。

真白な顔が、揃つてこつちを向いたと思うと。

「あら、お嬢様。」

「お師匠さん。」

一人がもう、空気草履の、媚かしい褻捌きで駆けて来る。目鼻は玉江。……もう一人は玉野であった。

紫玉は故郷へ帰った気がした。

「不思議な処で、と言いたいわね。見ぶつかい。」

「ええ、観光団。」

「何を悪戯いたずらをしているの、お前さんたち。」

と連立つらって寄る、汀に居た玉野の手には、船首みよしへ掛けつつ棹さおがあつた。

舩ふなは藍なほたあい、萌黄もえぎの翼かしろで、頭かしろにも尾べにも紅べにを塗ぬつた、鷓首げきしゆの船の屋形造。玩具おもちゃのようだ

が四五人は乗れるであろう。

「お嬢様。おめしなさいませんか。」

聞けば、向う岸の、むら萩いおりに庵いおりの見える、船主ふなぬしの料理屋にはもう交渉済で、二人は慰なぐさみに、これから漕出こぎだそうとする処ところだつた。……お前さんに漕こげるかい、と覚束おぼつかなさなに念ねんを押すと、浅くて棹さおが届くとどくのだから仔細しさいない。ただ、一ヶ所底の知れない深水ふかみずの穴あながあ

る。竜の口と称えて、ここから下の滝の伏樋に通ずるよし言伝える、……危くはないけれど、そこだけは除けたが可かろう、と、……こんな事には気軽な玉江が、つい駆出して仕誼を言いに行つたのに、料理屋の女中が、わざわざ出て来て注意をした。

「あれ、あすこですわ。」と玉野が指す、大池を良の方へ寄る処に、板を浮かせて、小さな御幣が立っていた。真中の築洲に鶴ヶ島というのが見えて、祠に竜神を祠ると聞く。……鶴首の船は、その島へ志すのであるから、滝の口は近寄らないで済むのであつたが。

「乗ろうかね。」

と紫玉はもう褌を巻くように、爪尖を揃えながら、

「でも何だか。」

「あら、なぜですえ。」

「御幣まで立つて警戒をした処があつちやあ、遠くを離れて漕ぐにしても、船頭が船頭だから気味が悪いもの。」

「いいえ、あの御幣は、そんなおどかしじやありませんの。不断は何にもないんだそうですけれど、二三日前、誰だか雨乞だと言つて立てたんだそうですの、この早ですから。」

八

岸をトンと盪すと、屋形船は軽く出た。おや、房州で生れたかと思うほど、玉野は思つたより巧に棹をさす。大池は静である。舷の朱欄干に、指を組んで、頬杖ついた、紫玉の胡粉のような肱の下に、萌黄に藍を交えた鳥の翼の揺るるのが、そこにばかり美しい波の立つ風情に見えつつ、船はするすると滑つて、鶴ヶ島をさして滑かに浮いて行く。

さまでの距離はないが、月夜には柳が煙るぐらいな間で、島へは棹の数百ばかりはある。

玉野は上手を遣る。

さす手が五十ばかり進むと、油を敷いたとろりとした静な水も、棹に搔かれてどこともなしに波紋が起つた、そのせいであろう。あの底知らずの竜の口とか、日射もそこばかりはものの朦朧として淀むあたりに、——微との風もない折から、根なしに浮いた板ながら真直に立っていた白い御幣が、スースーと少しずつ位置を転えて、夢のように一寸二寸ずつ動きはじめた。

凝と、……視るに連れて、次第に、緩く、柔かに、落着いて弧を描きつつ、その円い線

の合する処で、またスースーと、一寸二寸ずつ動出すのが、何となく池を広く大きく押拵げて、船は遠く、御幣ははるかに、不思議に、段々汀を隔るのが心細いようで、気も浮かりと、紫玉は、便少ない心持がした。

「大丈夫かい、あすこは渦を巻いているようだがね。」

欄干に頼杖したまま、紫玉は御幣を凝視めながら言った。

「詰りませんわ、少し渦でも巻かなけりや、余り静で、橋の上を這っているようすもの

、

とお転婆の玉江が洒落でもないらしく、

「玉野さん、船をあつちへ遣つてみないか?……」

紫玉が圧えて、

「不可いよ。」

「いいえ、何ともありやしませんわ。それだし、もしか、船に故障があつたら、おーいと呼ぶか、手を敲けば、すぐに誰か出て来るからって、女中がそう言っていたんですから。」
とまた玉江が言う。

成程、島を越した向う岸の萩の根に、一人乗るほどの小船が見える。中洲の島で、納涼

ながら酒宴をする時、母屋から料理を運ぶ通船である。

玉野さえ興に乗つたらしく、

「お嬢様、船を少し廻しますわ。」

「だって、こんな池で助船でも呼んでみたが可い、飛んだお笑い草で末代までの恥辱じゃあないか、あれお止しよ。」

——逆について船がぐいと廻りかけると、ざぶりと波が立った。その響きかも知れぬ。小さな御幣の、廻りながら、遠くへ離れて、小さな浮木ほどになっていたのが、ツウと浮いて、板ぐるみ、グイと傾いて、水の面にびたりとついたと思うと、
竜の頭、絵ける鬼火のごとき一条の脈が、竜の口からむくりと湧いて、水を一文字に、射て疾く、船に近づくと斉しく、波はぎつと鳴った。

女優の船頭は棹を落した。

あれあれ、その波頭がたちまち船底を噛むかと思えば、傾く船に三人が声を殺した。途端に二三尺あとへ引いて、薄波を一煽り、その形に煽るや否や、人の立つごとく、空へ大なる魚が飛んだ。

瞬間、島の青柳に銀の影が、パツと映して、魚は紫立つたる鱗を、冴えた金色に輝

やかしつゝ颯と匆ねたのが、翻然と宙を躍つて、船の中へどうと落ちた。その時、水がドブンと鳴った。

舳と艫へ、二人はアツと飛退いた。紫玉は欄干に絶つて身を転わす。落ちつつ胴の間で、一匆、匆ねると、そのはずみに、船も動いた。——見事な魚である。

「お嬢様！」

「鯉、鯉、あら、鯉だ。」

と玉江が夢中で手を敲いた。

この大なる鯉が、尾鰭を曳いた、波の引返すのが棄てた棹を攫つた。棹はひとりで底知れずの方へツラツラと流れて行く。

九

「……太夫様……太夫様。」

偶と紫玉は、宵闇の森の下道で真暗な大樹巨木の梢を仰いだ。……思い掛けず空

から呼掛けたように聞えたのである。

「ちよつと燈あかりを、……」

玉野がぶら下げた料理屋の提ちようちん灯ちんを留めさせて、さし交かわす枝を透かしつつ、——何事と問う玉江に、

「誰だか呼んだように思うんだがねえ。」

と言う……お師匠さんが、樹の上を視みているから、

「まあ、そんな処ところから。」

「そうだねえ。」

紫玉は、はじめて納得したらしく、瞳をそらす時、鬚まげに手を遣やつて、釵に指を触れた。

——指を触れた釵は鸚鵡おうむである。

「これが呼んだのかしら。」

と微醉ほろよいの目元を花やかに莞爾にっこりすると、

「あら、お嬢様。」

「可厭いやですよ。」

と仰山に二人が怯おびえた。女弟子の驚いたのなぞは構わないが、読者おびやかを怯おびしては不可いけない。

滝壺へ投沈めた同じ白金ブラチナの釵が、その日のうちに再び紫玉の黒髪に戻った仔細しさいを言おう。
 池で、船の中へ鯉が飛込むと、弟子たちが手を拍うつ、立騒ぐ声が響いて、最初は女中が
 小船で来た。……島へ渡した細綱を手繰つて、立ちながら操るのだが、馴なれたもので、あ
 とを二押三押、屋形船が来ると、由を聞き、魚うおを視みて、「まあ、」と目を睜みはつたきり、慌
 しく引返した。が、間まもあらず、今度は印半纏しるしばんてんを被きた若いものに船を操とらせて、亭
 主らしい年配としごろな法体ほつたいしたのが漕こぎつけて、「これはこれは太夫様。」亭主も逸いち早く
 それを知つていて、恭うやうやしく挨拶をした。浴衣の上だけけれど、紋の着いた薄羽織ひつを引かけて
 いたが、さて、「改めて御祝儀を申述べます。目の下二尺三貫目は掛かりましたよう。」とて、
 ……及び腰のぞに覗のぞいて魂消たまげている若衆わかいしゅに目配うなずせで領うなずせて、「かような大魚、しかも出世
 魚りぎよと申す鯉魚りぎよの、お船へ飛込みましたというは、類たぐい稀まれな不思議な祥瑞しょうずい。おめでと
 う存じまする、皆、太夫様の御人徳。続きましたは、手前預りまする池なり、所持の屋形
 船。烏漕おこがましゆうござりますが、従つて手前どもも、太夫様の福分、徳分、未曾有みぞうの御
 人氣の、はや幾分かおこぼれを頂戴うけいたしたも同じ儀で、かような心嬉しい事はござりま
 せぬ。なおかくの通りの早魃かんぼつ、市内はもとより近郷隣国、ただ炎の中に悶もたえまする時、
 希有けうの大魚の躍りましたは、甘露、法雨やがて、禽獸きんじゆう草木そうもくに到るまでも、雨に蘇よみが

生りまする前表かとも存じまする。三宝の利益、四方の大慶。太夫様にお祝儀を申上げ、われらとても心祝いに、この鯉魚を肴に、祝うて一献、心ばかりの粗酒を差上げとう存じまする。まず風情はなくとも、あの鳥影にお船を繋ぎ、涼しく水ものをさしあげて、やがてお席を母屋の方へ移しましょう。」で、辞退も会釈もさせず、紋着の法然頭は、もう屋形船の方へ腰を据えた。

若衆に取寄せさせた、調度を控えて、島の柳に纏った頃は、そうでもない、汀の人立を遮るためと、用意の紫の幕を垂れた。「神慮の鯉魚、等閑にはいたしませんまい。略儀ながら不束な田舎料理の庖丁をお目に掛けます。」と、ひたりと直つて真魚箸を構えた。

——釵は鯉の腹を光つて出た。——童宮へ往来した釵の玉の鸚鵡である。

「太夫様——太夫様。」

ものを言おうも知れない。——

とばかりで、二声聞いたように思っただけで、何の氣勢もしない。

風も囁かず、公園の暗夜は寂しかった。

「太夫様。」

「太夫様。」

うっかり釵を、またおさえて、

「可厭だ、今度はお前さんたちかい。」

十

——水のすぐれ覚ゆるは、

西天竺せいてんしゆくの白鷺池はくろち、

じんじようきよゆうにすみわたる、

昆明池こんめいちの水の色、

行末ゆくすえ久しく清むすとかや。

「お待ち。」

紫玉は耳を澄すました。道の露芝、曲水の汀にして、さらさらと音する流ながれの底に、聞きも知らぬ三味線の、沈んだ、陰気な調子に合せて、微かすかに唄う声がする。

「——坊さんではないかしら……」

紫玉は胸が轟いた。

あの漂泊の芸人は、鯉魚の神秘を視た紫玉の身には、もはや、うみ汁のごとく、唾、涎の臭い乞食坊主のみではなかつたのである。

「……あの、三味線は、」

夜陰のこんな場所で、もしや、と思う時、掻消えるように音が留んで、ひたひたと小石を潜つて響く水は、忍ぶ登音のように聞える。

紫玉は立留まつた。

再び、名もきかぬ三味線の音が陰々として響くと、

——日本一にて候ぞと申しける。鎌倉殿ことごとしや、何処にて舞いて日本一とは申しけるぞ。梶原申しけるは、一歳百日の早の候いけるに、賀茂川、桂川、水瀬切れて流れず、筒井の水も絶えて、国土の悩みにて候いけるに、——

聞くものは耳を澄まして袖を合せたのである。

——有験の高僧貴僧百人、神泉苑の池にて、仁王経を講じ奉らば、八大竜王も慈現納受たれ給うべし、と申しければ、百人の高僧貴僧を請じ、仁王経を講ぜられしかども、その験もなかりけり。また或人申しけるは、容顔美麗なる白

拍子しょうしを、百人めして、――

「御坊様。」

今は疑うべき心も失せて、御坊様、と呼びつつ、紫玉が暗中を透して、声する方に、緋すがのように寄ると思うと、

「燈ひを消せ。」

と、蕭さびたが力ある声して言った。

「提ちようちん燈を……」

「は、」と、返事と息を、はッはッとはずませながら、一度消損けしそこねて、慌あわただしげに吹消した。玉野の手は震えていた。

――百人の白拍子をして舞わせられしに、九十九人舞いたりしに、その驗もなかりけり。静しずか一人舞いたりとても、竜神示現じげんあるべきか。内侍所ないしどころに召されて、緑ろくおもきものにて候にと申したりければ、とても人数ひとかずなれば、ただ舞わせよと仰せ下されければ、静が舞いたりけるに、しんむしよの曲という白拍子を、――

燈ひを消すと、あたりがかえつて朦朧もうろうと、薄く鼠色ほのに仄ほのめく向うに、石の反橋そりばしの欄干らんかんに、僧形そうぎようの墨こくもの法衣ほつえ、灰色こがせになつて、蹲うづくまるか、と視れば欄干らんかんに胡坐あぐら搔かいて唄う。

橋は心覚えのある石橋の巖組である。気が着けば、あの、かくれ滝の音は遠くどうど
うと鳴つて、風のごとくに響くが、掠れるほどの糸の音も乱れず、唇を合すばかりの唄も
遮られず、嵐の下の虫の声。が、形は著しいものではない、胸をくしゃくしゃと折つて、
坊主頭を、かく、と俯向けて唄うので、頸を抽いた転転に掛る手つきは、鬼が角を弾く
と言わば巖めしい、むしろ黒猫が居て顔を洗うというのに適する。

——なから舞いたりしに、御輿の岳、愛宕山の方より黒雲にわかに出て、洛
中 にかかると見えければ、——

と唄う。……紫玉は腰を折つて地に低く居て、弟子は、その背後に蹲んだ。

——八大竜王鳴渡りて、稻妻ひらめきしに、諸人目を驚かし、三日の洪水を流し、
国土安穩なりければ、さてこそ静の舞に示現ありけるとて、日本一と宣旨を給り
けると、承り候。——

時に唄を留めて黙つた。

「太夫様。」

余り尋常な、ものいいだったが、

「は、」と、呼吸をひいて答えた紫玉の、身動きに、帯がキと擦れて鳴つたほど、深く身

に響いて聞いたのである。

「癩坊主が、ねだり言を肯うて、千金の釵を棄てられた。その心操に感じて、些細ながら、礼心に密と内証の事を申す。貴女、雨乞をなさるが可い。——天の時、地の利、人の和、まさしく時節じや。——ここの大池の中洲の島に、かりの法壇を設けて、雨を祈ると触れてな。……袴、練衣、烏帽子、狩衣、白拍子の姿が可かろう。衆人めぐり見る中へ、その姿をあの島の柳の上へ高く顕し、大空へ向つて拝をされい。祭文にも歌にも及ばぬ。天竜、雲を遣り、雷を放ち、雨を漲らすは、明午を過ぎて申の上刻に分豪も相違ない。国境の山、赤く、黄に、峰岳を重ねて爛れた奥に、白蓮の花、玉の掌ほどに白く聳えたのは、四時に雪を頂いて幾万年の白山じや。貴女、時を計つて、その鸚鵡の釵を抜いて、山の其方に向つて翳すを合図に、雲は竜のごとく湧いて出よう。——なおその上に、可いか、名を挙げられい。……」

——賢人の釣を垂れしは、

巖陵瀬の河の水。

月影ながらもる夏は、

山田の笕の水とかや。——……

十一

翌日の午後の公園は、炎天の下に雲よりは早く黒くなつて人が湧いた。煉瓦を羽蟻で包んだような凄じい群集である。

かりに、鎌倉殿としておこう。この……県に成上の豪族、色好みの男爵で、面構も風采も巨頭公によう似たのが、劇興行のはじめから他に手を貸さないで紫玉を鼻肩した、既に昨夜もある処で一所になる約束があつた。その間の時間を、紫玉は微行したのである。が、思いも掛けない出来事のために、大分の隙入をしたものの、船に飛んだ鯉は、そのよしを言づけて初穂というのを、氷詰めにして、紫玉から鎌倉殿へ使を走らせたほどなのであつた。――

車の通ずる処までは、もう自動車が出来て待つていて、やがて、相会すると、ある時間までは附添つて差支えない女弟子の口から、真先に予言者の不思議が漏れた。

一議に及ばぬ。

その夜のうちに、池の島へ足代を組んで、朝は早や法壇が調つた。無論、略式である。

具社の神官に、故実の詳しいのがあって、神燈を調べ、供饌を捧げた。

島には鎌倉殿の定紋ついた帷幕を引繞らして、威儀を正した夥多の神官が詰めた。紫玉は、さきほどからここに控えたのである。

あの、底知れずの水に浮いた御幣は、やがて壇に登るべき立女形に対して目触りだ、と逸早く取退けさせ、樹立さしいでて蔭ある水に、例の鷓首の船を泛べて、半ば紫の幕を絞った裡には、鎌倉殿をはじめ、客分として、県の頭官、勲位の人々が、杯を置いて籠った。——雨乞に参ずるのに、杯をめぐらすという故実は聞かぬが、しかし事実である。伶人の奏楽一順して、ヒユウと簫の音の虚空に響く時、柳の葉にちらちらと緋の袴がかかった。

群集は波を揉んで動揺を打った。

あれに真白な足が、と疑う、緋の袴は一段、階に劃られて、二三条の紅の霞を曳きつつ、上紫に下萌黄なる、蝶鳥の刺繍の狩衣は、緑に透き、葉に靡いて、柳の中を、するすると、容顔美麗なる白拍子。紫玉は、色ある月の風情して、一千の花の燈の影、百を数うる雪の供饌に向うて法壇の正面にすらりと立つ。

花火の中から、天女が斜に流れて出ても、群集はこの時くらい驚異の念は起すまい。

烏帽子もともにこの装束は、織ものの模範、美術の表品、源平時代の参考として、かつて博覧会にも飾られた、鎌倉殿が秘蔵の、いずれ什物であった。

さて、遺憾ながら、この晴の舞台において、紫玉のために記すべき振事は更でない。渠は学校出の女優である。

が、姿は天より天降った妙に艶なる乙女のごとく、国を囲める、その赤く黄に爛れた峰岳を貫いて、高く柳の間に懸った。

紫玉は恭しく三たび虚空を拝した。

時に、宮奴の装した白丁の下男が一人、露店の飴屋が張りそうな、渋の大傘を畳んで肩にかついたので、法壇の根に頭れた。——これは怪しからず、天津乙女の威厳と、場面の神聖を害つて、どうやら華魁の道中じみだし、雨乞にはちと行過ぎたものようだった。が、何、降るものと極れば、雨具の用意をするのは賢い。……加うるに、紫玉が被いだ装束は、貴重なる宝物であるから、驚破と言わばさし掛けて濡らすまいための、鎌倉殿の内意であった。

——さればこそ、このくらい、注意の役に立ったのはあるまい。——
あわれ、身のおき処がなくなつて、紫玉の裾が法壇に崩れた時、「状を見ろ。」「や、

身を投げる。「飛込め。」——わツと群集の騒いだ時、……堪らぬ、と飛上つて、紫玉を圧えて、生命を取留めたのもこの下男で、同時に狩衣を剥ぎ、緋の袴の紐を引解いたのも——鎌倉殿のためには敏捷な、忠義な奴で——この下男である。

雨はもとより、風どころか、余の人出に、大池には蜻蛉も飛ばなかつた。

十二

時を見、程を計つて、紫玉は始め、実は法壇に立つて、数万の群集を足許に低き波のごとく見下しつつ、昨日通つた坂にさえ蟻の伝うに似て押覆す人数を望みつつ、徐に雪の頤に結んだ紫の櫻を解いて、結目を胸に、烏帽子を背に掛けた。

それから伯爵の釵を抜いて、意気込んで一振り振ると、……黒髪の颯と捌けたのが烏帽子の金に裏透いて、さながら金屏風に名誉の絵師の、松風を墨で流したようで、雲も童もそこから湧くか、と視められた。——これだけは工夫した女優の所作で、手には白金がヒ首のごとく輝いて、凄艶比類なき風情であつた。

さてその鸚鵡を空に翳した。

紫玉の睜みはつた瞳めには、確たしかに天際てんがいの僻へ辺へんに、美女みよめの掌てに似た、白山は、白く清く映つたのである。

毛筋ほどの雲も見えぬ。

雨乞の雨は、いずれも後刻の事にして、そのまま壇ぐだを降くだつたらば無事だつたらう。ところが、遠雷の音でも聞かすか、暗転あんてんにならなければ、舞台に馴なれた女優だけに幕が切れない。紫玉は、しかし、目ま前あたり鯉魚ぎよの神異を見た、怪しき僧の暗示と讖しんげん言げんを信じたのであるから、今にも一片の雲は法衣の袖のように白山の眉に翻るであろうと信じて、しばしを待つ間まを、法壇を二廻り三廻り緋の袴はかまして輪あに歩あるいた。が、これは鎮守の神巫みこに似て、しかもなんば、という足どりあしどりで、少なからず威嚴ゐげんを損じた。

群集の思わんほどはまかも憚おそられて、腋わきの下に衝つと冷き汗を覚えたのこそ、天人てんじんの五衰ごすいのはじめとも言おう。

気をかえて屹きつとなつて、もの忘れした後こうけん見みに烈はげしくきつかけを渡わたす状さまに、紫玉は虚空こくうに向つて伯爵の鸚鵡おうおうを投げた。が、あの玩具おもちゃの竹蜻蛉たけとんぼのように、晃きら々と高く舞つた。

「大神楽だいしかぐら！」

と喚わめいたのが第一番の半畳で。

一人口火を切ったから堪らない。練馬大根と言う、おかめと喚く。雲の内侍と呼ぶ、雨しよぼを踊れ、と怒鳴る。水の輪の拡がり、嵐の狂うごとく、聞くも堪えない讒謗罵詈は雷のごとく哄と沸く。

鎌倉殿は、船中において嚇怒した。愛寵せる女優のために群集の無礼を憤ったのかと思うと、——そうではない。この、好色の豪族は、疾く雨乞の験なしと見て取ると、日の昨の、短夜もはや半ばなりし紗の蚊帳の裡を想い出した。……

雨乞のためとて、精進潔斎させられたのであるから。

「漕げ。」

紫幕の船は、矢を射るように島へ走る。

一度、駆下りようとした紫玉の緋裳は、この船の激しく襲ったために、一度引留められたものである。

「……………」

と喚く鎌倉殿の、何やら太い声に、最初、白丁に豆烏帽子で傘を担いだ宮奴は、島のなる幕の下を這って、ヌイと面を出した。

すぐに此奴が法壇へ飛上った、その疾さ。

紫玉がもはや、と思ひ切つて池に飛ぼうとする処を、おさ 押えて、そして剥はいだ。
女の身としてあらりようか。

あの、雪を束つかねた白いものの、壇の上にひれ伏した、あわれな状さまは、月を祭る供物に似て、非ず、早かんぱつ魘の鬼一口の犠にえ牲である。

ヒイと声を揚げて弟子が二人、幕の内、手放しにわつと泣いた。

赤ら顔の大入道の、首きび抜きはしの浴衣の尻しんを、七のずまで引めくつたのが、苦り切つたる顔して、つかつかと、階きざはしを踏んで上つた、金きん方かたか何ぞであろう、芝居もので、

肩をむずと取ると、

「何だ、状さまは。小町しずかや静しずじやあるめえし、増長しやがるからだ。」

手の裏かえす無情さは、足も手もぐたりとした、烈日に裂けかかる氷のような練ねり絹ぎぬの、紫玉のふくよかな胸を、酒さか焼やけの胸むねに引ひ摺つみ、毛脛けすねに挟んで、

「立たねえかい。」

「口惜しい！」

紫玉は舷ふなばたに縋すがつて身を震わす。——真夜中の月の大池に、影の沈める樹の中に、しほめる睡蓮すいれんのごとく漾ただよいつつ。

「口惜しいねえ。」

車馬の通行を留めた場所とて、人目の恥あはゆに歩行あゆみもならず、——金方きんかたの計ひらいで、——
 一方松亭ばんしょうていという汀みぎわなる料理店に、とにかく引籠ひっこもる事にした。紫玉はただ引被ひっかついで打伏した。が、金方は油断せず。弟子たちにも旨を含めた。で、次場所の興行かくては面白かるまいと、やけ酒を煽あおっていたが、酔倒よたうれて、それは寝た。

料理店の、あの亭主は、心優やさしいもので、起居たちいにいたわりつ、慰めつ、で、これも注意すきはしたらしいが、深更のしかも夏の夜の戸鎖とさし浅ければ、伊達巻だてまきの跣足はだしで忍んで出る隙すきは多かつた。

生命いのちの惜おしからぬ身には、操るまでの造作も要らぬ。小さな通船かよいぶねは、胸の悩みに、身もだえするままに揺動ゆりうごいて、萎しおれつつ、乱れつつ、根を絶えた小船の花の面影は、昼の空とは世をかえて、皓々こうこうとして雫しずくする月の露吸う力もない。

「ええ、口惜しい。」

乱れがみをりつつ、手で、砕けよ、とハタと舷を打つと……時の間に瘦せた指は細く
 なって、右の手の四つの指環は明星に擬えた金剛石のをはじめ、紅玉も、緑宝玉も、ス
 ルリと抜けて、きらきらと、薄紅に、浅緑に皆水に落ちた。

どうでもなれ、左を試みに振ると、青玉も黄玉も、真珠もともに、月の美しい影を輪に
 して沈む、……竜の口は、水の輪に舞う処である。

ここに残るは、名なればそれを誇として、指にも髪にも飾らなかつた、紫の玉ただ一つ。
 ——紫玉は、中高な顔に、深く月影に透かして差覗いて、千尋の淵の水底に、いま落
 ちた玉の緑に似た、門と柱と、欄干と、あれ、森の梢の白鷺の影さえ宿る、櫓と、窓と、
 楼と、美しい住家を視た。

「ぬしにもなつて、この、この田舎のものども。」

継る波に力あり、しかと引いて水を掴んで、池に倒に身を投じた。爪尖の沈むのが、
 釵の鸚鵡の白く羽うつがごとく、月光に微に光つた。

「御坊様、貴方は？」

「ああ、山国の門附芸人、誇れば、魔法つかいと言いたいが、いかな、さまでの事もな

い。昨日きのうから御目に掛けた、あれは手品じや。」

坊主は、欄干まがに擬まがう苔蒸こけむした井桁いげたに、破法衣やれごろもの腰を掛けて、活いけるがごとく爛々らんらんとして眼まなこの輝く青銅の竜の蟠わだかまれる、角つのの枝えだに、肱ひじを安らかに笑みつつ言った。

「私に、何のお怨うらみみで？……」

と息せくと、眇めづかちの、ふやけた目珠めだまぐるみ、片頬たなそこを掌てのひらでさし蔽おほうて、

「いや、辺境のものは気が狭い。貴方が余り目覚しい人氣ゆえに、恥入るか、もの嫉ねたみを
して、前芸をちよつと遣やつた。……さて時に承うわゆるが太夫、貴女あなたはそれだけの御身分、そ
れだけの芸の力で、人が雨乞あまごをせよ、と言いわば、すぐに優わや伎おぎの舞台ぶたいに出て、小町も静も
勤めるのかな。」

紫玉いづたまは巖いわに俯うつむ向むいた。

「それで通るか、いや、さて、都は気が広い。——われらの手品はどうじゃろう。」

「ええ、」

と仰おほいで顔を視みた時、紫玉はゾツと身に沁しみた、腐くれた坊主に不思議な恋を知つたのである。

「貴方なら、貴方なら——なぜ、さすろうておいで遊ばす。」

坊主は両手で顔をおさええた。

「面目ない、われら、ここに、高い貴い処に恋人がおわしてな、雲霧を隔てても、その御お足許あしもとは動かれぬ。や！」

と、慌あわただしく身を退しざると、呆あきれ顔してハツと手を拵あきげて立つた。

髪黒く、色雪のごとく、厳いつくしく正しく艶えんに気高き貴女きじよの、繕きしよわぬ姿したのが、すらりと入った。月を頸うなじに掛けつと見えたは、真まっしろ白ひがさな涼傘ひがさであった。

膝と胸を立てた紫玉を、ちらりと御覽ごらんずると、白やかなる手尖てさきを軽く、彼が肩に置いて、私ぶを打ぶったね。——雨と水の世話をしに出ていた時、……」

装よそおいは違ちがった、が、幻の目にも、面影は、浦安の宮、石の手水鉢ちようすばちの稚児ちごに、寸分すんぶんのかわりはない。

「姫様、貴女あなたは。」

と坊主が言った。

「白山へ帰る。」

ああ、その剣ヶ峰の雪の池には、竜女の姫神おわします。

「お馬。」

と坊主が呼ぶと、スツと畳んで、貴女が地に落した涼傘は、身震をしてむくと起きた。手まさぐりたまえる緋の総は、たちまち紅の手綱に捌けて、朱の鞍置いた白の神馬。

ずつと騎すのを、轡頭を曳いて、トトトト——と坊主が出たが、

「纏頭をするぞ。それ、錦を着て行け。」

かなぐり脱いだ法衣を投げると、素裸の坊主が、馬に、ひたと添い、紺碧なる巖の聳つ岨を、翡翠の階子を乗るように、貴女は馬上にひらりと飛ぶと、天か、地か、渺茫たる広野の中をタタタタと蹄の音響。

蹄を流れて雲が漲る。……

身を投じた紫玉の助かっていたのは、靈沢金水の、巖窟の奥である。うしろは五十

万坪と称うる練兵場。

紫玉が、ただ沈んだ水底と思つたのは、天地を静めて、車軸を流す豪雨であつた。――

雨を得た市民が、白身に破法衣した女優の芸の徳に対する新たなる渴仰の光景が見せた。

大正九（一九二〇）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十卷」岩波書店

1941（昭和16）年5月20日第1刷発行

※疑問点の確認にあたっては、底本の親本を参照しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：今井忠夫

2003年8月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

伯爵の釵

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>